

〈修士論文要〉

『源氏物語』朝顔論

朝顔巻の女主人公の朝顔の姫君は、その性質や登場に目立った特徴を持ってゐる。姫君が初めて登場するのは、「式部卿の宮の姫君に朝顔たてまつり給し歌などをすこしほをゆがめて語るも聞こゆ。」⁽¹⁾という、源氏が姫君に朝顔の花に添えた歌を贈ったことを語る女房たちの噂話の中でのことであつた。それ以降、物語中に点描されるものの大々的には取り上げられることがなかつた姫君は、朝顔巻で突然に巻の女主人公となる。その姫君は、源氏の求愛を拒み続けた女性として登場するのであつた。

第一章では、朝顔の姫君が「源氏物語」の中で、どのような女性として描かれてゐるのかを姫君の心の内と周りの人々（登場人物）の視点との両面から、姫君の人物像を考えてゆく。

⁽²⁾かゝる事を聞き給にも、朝顔の姫君は、いかで人に似じと深くおぼせば、はかなきさまなりし御返などもおさくなし。さりとて、人にく、はしたなくはもてなし給はぬ御けしきを、君も猶こ⁽³⁾と也とおほしわたる。

*
今 西 明日香

朝顔の姫君は、六条御息所が源氏との仲で非常に思い悩んでゐるという噂を聞くにつけて、自分はその二の舞はすまいと強く警戒してゐることがわかる。しかし、そうかといつて、源氏に具合の悪い思いをさせる素振りはないのであつた。姫君の周りにいた人物である女五の宮や故式部卿宮、女房たちは、源氏と姫君が結婚することを望んでゐたと考えられる。また女房たちは、姫君が年月を経ることにいつそ引つ込み思案になつてゐるといふ。一方源氏は、そのような姫君の性格は世間の人とは違ふと感じてゐた。源氏の目からは、姫君は朝顔巻以前に点描されてゐた頃の性格と変わらなく映つてゐたのである。また姫君自身はというと、源氏を拒む気持ちは変わらず、源氏に対しては、きまりの悪い思いはさせないようにと配慮をしてゐたのである。源氏を「拒む」という意志を持ち続けた女性であつたといえる。

第二章では、朝顔巻で交わされる三組六首の贈答歌をみてゆく。ここでは特に、源氏が朝顔の花を添えて贈つた「見しおりの露忘れぬあさがほの花のさかりはすぎやしぬらん」と、それに対して姫君が返した「秋はてて霧のまがきにむすはほれあるかなきかにうつるあさがほ」の歌の解釈を中心に進め、朝顔の姫君の人物像をより具体的にす

る。

「あさがほ」の花には、朝の女性の顔、または、花の命の短いこと、はかない花であることと無常観を結びつけて歌に詠まれることがある。その「あさがほ」の花が当時、何の花を指して「あさがほ」と称しているのかには、桔梗・榎など諸説ある。では、「源氏物語」に登場する「あさがほ」は、どのような植物であったのか、物語中の描写から考えてゆく。朝顔巻では、

枯れたる花どもの中に、朝顔のこれかれに這ひまつはれて

同じく、つたう植物の描写が夕顔巻に、

切懸だつものに、いと青やかなる葛の心ちよげに這ひかゝれるに

〈中略〉

あやしきうちよほほいてむねくしからぬ軒のつまなどに這ひまつはれたるを

とある。そのため、「あさがほ」も這いまわつてつたう植物であったので、現在の朝顔を考えるのが妥当であるといえる。

「見しおりの」・「秋はてて」の贈答歌において、朝顔の姫君は朝顔の花に例えられている。見たときのことか少しも忘れられない朝顔の(その)花の盛りは過ぎてしまったのでしょうか、と挑発的な

歌を贈った源氏に対して、姫君は、あなたのおっしゃるとおり、私の美しい盛りは過ぎてしまっています。というような嫌味で返したのである。ここでも姫君を想い続ける源氏と、それを拒もうとする姫君の思いを伺い知ることができる。朝顔の姫君が、源氏を拒むという意志を持った女性であることがわかる。

高橋和夫氏は、「欠巻X―特に朝顔の姫君について―」において次のように著されている。

その時この人物が「式部卿官の姫君」として命名されていても、それが系譜的に誤解されない限りは十分な命名名なのである。ところがそれが「朝顔の姫君」となる場合には、それは姫君であり、かつ父親として式部卿官を持っている所の人」というのとはちがつて、それは姫君でありかつ朝顔と何等かの関係を持っている所の人」という意味である。この「何等かの」ということが「父親として」とは明らかに異なる点である。

「朝顔の姫君」が「朝顔」という名を持つていることから「朝顔」の花との関連があったのではないかと考えられる。

そこで、第三章では、当時の人々の朝顔と夕顔の花への認識を明らかにしてゆく。「枕草子」では、

夕顔は、花のかたちも朝顔に似て、いひつづけたるに、いとをか

しかりぬべき花の姿に、實のありさまこそ、いとくちをしけれ。などさはた生ひ出でけん。ぬかづきなどいふものやうにだにあればかし。されど、なほ夕顔といふ名ばかりはをかし。

夕顔の花は実が不格好であり、ひどく残念であるなどと評され、あまり良く書かれていない。ここで注目したい点がある。それは、朝顔が引き合いに出され、夕顔と比較されていることである。夕顔の花と朝顔の花の形が非常に良く似たものであり、朝顔と夕顔を一組にして呼ぶことがふさわしいとしている。原岡文字氏は「枕草子」の幾つかの箇所を意識的に汲み上げながら描かれたもののように思われるとされてきた。そこで、『源氏物語』に目を向けてみたい。このような「枕草子」からの意識的な汲み上げは、朝顔・夕顔の花にもいえるのではない。夕顔巻の女主人公、夕顔の女も、朝顔巻の女主人公、朝顔の姫君とともに花に象徴される女性である。そこで、この夕顔巻と朝顔巻に、何か意図的なものがあつたということがいえるのではないかと考えられる。

【赤染衛門集】

朝がほ、夕がほ植ゑてみしころ

411 ひろまこそなくさむかたはなかりけれ朝夕がほの花もなきまは

ここでは、朝顔と夕顔をともに植ゑていたことがわかる。朝には朝

顔の花が咲き、夕には夕顔の花が咲くので、朝夕は心を楽しみますことができるが、昼にはその手段がないとしているのである。

これらのことから、当時の人々の朝顔と夕顔の花の認識は、次の四点が挙げられる。

- ・ 花の形がよく似ており、一組として考えてもおかしくない。
- ・ 夕顔は朝顔の花より劣る。
- ・ ともに、短命ではかない花である。
- ・ 心を楽しませてくれる存在である。

当時の人々には、朝顔・夕顔に対するこのような認識があつたといえる。当然、作者にもこのような認識があつたと考えることができる。そのため、朝顔・夕顔両巻の女主人公を読み手が意識的に比較するであろうことが推測できたのではないだろうか。つまり作者は、花の特長を活かしつつ、この両巻の女主人公たちを対照的に描こうとしたのではないかと考えることができるのである。

それを検証するために、第四章では、夕顔巻と朝顔巻での類似点と相違点を順に挙げていった。その結果、プロットの類似点としては、源氏が見舞いに行くという冒頭部分、女房、鍵や錠の不具合によって、源氏が車中で待たされることとなり、その間、女の情報を得る時間が与えられていたこと、この世のものではないものの出現、女性たちの苦悩といったことである。相違点は、夕方に咲く夕顔の花に象徴され

た夕顔の女と、朝方に咲く朝顔の花に象徴された朝顔の姫君の性質とその運命である。中の品の女性であった、従順で控え目な性格を持ち、そして物語中ではかなく死を迎えことになる夕顔の女と、高貴な身分であり、源氏を拒むという自らの意志を持ち、そして物語中では、生きつづけ出家することとなる朝顔の姫君、ここからしても、両者は対照的に描かれていることがわかる。当時の朝顔・夕顔の花に対する認識が反映していたことがいえると考えられる。

それでは、はかないものの象徴である「朝顔」の名を持つ姫君がなぜ物語中を生き続けたのか、朝顔の姫君の「はかなさ」とは何であったのかを第五章で述べている。宇治の大君は、薫から枯れた朝顔を贈られる。大君も「拒む」女性であったのだ。朝顔の姫君も源氏から歌とともに、「あるかなきかに咲きて、にほひもことに変はれる」朝顔を贈られる。その枯れた朝顔が意味すること、それは「手に入れたくても手に入れることができないものの象徴」であったのである。つまり、枯れた朝顔を贈られた朝顔の姫君は、「拒む」という性質を持った女性であり、源氏が手に入れたくても手に入れることができない存在であったのである。はかなく枯れることによって、手に入れたくても思うものが、その対象を手に入れることができないのである。朝顔の姫君の「はかなさ」は枯れた朝顔に象徴されるように「拒む」という性質を持つということであると結論に至る。

註

- (1) 『源氏物語』の原文は、『新日本古典文学大系』岩波書店によった。以降原文は特にことわらない場合、同『新大系』による。帯木巻 六三頁 一三行
- (2) 葵巻 二九二頁 一行
- (3) 朝顔巻 二五七頁 一〇行
- (4) 朝顔巻 二五七頁 一五行
- (5) 『日本古典文学全集』昭和四七年一月二五日発行 小学館 朝顔巻 四六五頁 頭注
- (6) 朝顔巻 二五七頁 五行
- (7) 夕顔巻 一〇一頁 一行
- (8) 『源氏物語の主題と構想』昭和五五年一〇月一五日 三版発行 桜楓社
- (9) 『日本古典文学大系』「草の花は」(六七) 昭和三三年九月五日 第一刷発行 岩波書店
- (10) 『朝顔の巻の読みと「視点」』『源氏物語の人物と表現』二〇〇三年五月一日発行 翰林書房
- (11) 『赤染衛門集全釈』「私家集 全釈叢書二」昭和六一年九月三〇日発行 風間書房 著者||関根慶子・安部俊子・林マリヤ・北村杏子・田中恭子
- (12) 朝顔巻 二五七頁 六行